

# 義太夫

## 中国福建省の旅

義太夫協会会長 田 辺 秀 雄

義太夫協会会報

第42号

昭和63年6月20日

社団法人 義太夫協会発行

〒104 東京都中央区銀座

6-18-2 新橋劇場 B2

TEL (541)5471

この三月二十七日から四月五日まで中国へ行ってきた。目的は東南部にある福建省の音楽や劇を見学する為である。ここには大変古いと言われる南音という音楽があって、私の父が愛し、今世紀初め頃のそのレコードなども数枚持っていて、ついには大正十一年に台湾の音楽調査を行った際に厦門まで渡りそれを聴きに行ったという経緯があり、私も幼い時からレコードで聴いていたほどなので、昔から一度その本場で聴いて見たいと思っていた。丁度このあたりの劇に大きい関心を持って研究旅行のパーティを作ろうという、本協会でも活躍している景山正隆氏に誘われたのでそれに参加したわけである。

形をなすもとなつた遣隋使や遣唐使の時代から日本と中国を結ぶ航路は福建が一番多く、また琉球の冊封使などもここから往復した。浄瑠璃や歌舞伎で有名な国姓爺鄭成功もこの地の人で、その他何かと日本人には親しみのある土地なのである。

ここは台湾の対岸である為か、解放后永いこと外国人は入ることが出来なく、最近認められるようになった。今では華僑と同じく台湾人も故郷帰りが行われているという話だし、例の金門島もうっすらと見えたが全く平和な感じであった。

さて私にとっては三度目の訪中でこの前は七年前だが、その間にも随分変わってしまったという印象である。今回は上海から入り、福州、莆田、遊仙、泉州、厦門、広州、と回

り香港から帰国したのだが、上海や特に広州の発展は凄まじいほどで、新しい大きなビルが建ち並び、自家用の高級車も走り、何と言っても人々の服装がカラフルで、以前には暗い感じを与えていた人民服などはほとんど見られず、景山氏が人民帽を買いたいと言っていたのが店でも見当たらなかつた程だった。

さて上海では金沙江飯店という新しいホテルに泊まったが、大変豪華で前二回に泊まった老舗の錦江飯店のサービスの悪さとは比べものにならない。福州の華僑大厦などは以前には想像もつかない豪華さで日本以上と言っても過言ではなからう。泉州は温泉があり、厦門は昔のものであったが、情緒があった。

広州は白天鵝飯店という新しい所だが専用の高速道路まであるという、こだけで一つの町を作っている感じである。いずれも観光や華僑の為なのである。その代わり莆田と遊仙などは名こそ賓館だが全くの田舎の宿で、風呂も入れず、朝顔も洗えなかつた。ここは日本人など初めてであるうが、私には大変気がいった。特に田舎の料理が皆の人気であった。

(次頁へ)





(前頁より)

音楽や劇の仕事の間には土地々々の名所も見て廻った。上海では玉仏寺という寺に行ったが、台湾や東南アジアの華僑ほどではないとしても、日本並の信者がお参りに来ていたし、葬式も行われていた。社会主義国家では宗教はアヘンの筈だが、やはりそうは行かないのであるうか。序でに寺のことを言うと、福州では鼓山の涌泉寺、莆田の広化寺、泉州の開元寺など、昔から有名で広大な境内を持つ由緒ある名刺を見学した。これらは勿論文革で粉々に破壊されたわけなのだが、私の見た所では全く分らないほどに復元されている。恐らく破壊以前より美しくなったのではあるまいか、話によると福建は華僑の最も多い出身地なので億という単位の抛金があったというが、政府もこうした文化財を尊重しているのは嬉しいことである。仏僧も若い人が多くいて、中には三十代の住職もいた。宗教もすっかり回復したようである。

余計な印象が先になってしまったが、上海に一泊、翌日の飛行機で福建省都の福州へ、霧の為に半日遅れたが、遂に福建滞在中連日雨と曇りだった。時期が雨季の為である。福州では閩(びん)劇というこの地方劇を見たが、まことに驚いたことに、「潘金蓮」といった原本が有名な好色本を扱ったものが出てきた。一昔前のことを考えなくても目をこすったほどであった。

箏篋といった日本には残っているが向こうには珍しい古楽器も用いられていて、これから連日の音楽に大きな期待を抱かせた。次の

町は莆田と遊仙という小さな町でここには両方の名をとった莆仙戯という劇がある。莆田では夜に少し離れた農村で屋台を組んでの村芝居を見に行った。小さい道教の寺の前の広場で村人が暗い夜道を沢山集まって楽しんでしたが、私もふと昔の日本を思い出し懐かしく感じた。この莆田で冠婚葬祭に用いられる楽隊の十音八楽というのを聴いた。三絃を絃一本だけにして弾くなどまことに素朴な音楽で楽しませてくれた。

泉州はかつての中国最大の貿易港で大きな都市、ここで待望の南音(南曲、南楽ともいう)をゆっくり鑑賞、永年の懐れを満足させた。この南音では尺八を使う。日本の尺八は勿論中国渡りだが、今中国では福建以外には残っていない。形も大きさも日本のに似ているが前の孔は日本のが四なのにくこのは五である。私は一本求めてきた。ここで見た梨園戯という劇は古い感じが残っていて私は大変気に入った。特に「李阿仙」というのに日本にも平安朝時代に行われた蹴鞠が扱われていて面白かった。また人形芝居で西遊記の「火焰山」を見た。操りなのだが、大変に技巧的でまるで曲芸のようだった。私はインドのウダイプールというところの民俗芸能博物館で世界的に有名な操りを見たが、この泉州のものも規模が大きく動きも複雑である。どうしてもわからないところがあつたので、終わってから舞台上がってよく見たら上から操るだけでなく、下でも棒で扱っていた。お馴染みの孫悟空が魔王とお互い動物に姿を変え闘

うくだりである。

ここに二泊、厦門(アモイ)に行く。楽しみにしていたこの南音は聴くことが出来なくて残念であったが、亡父が六十五年前に訪れその時の写真で見えていた鼓浪嶼(コロンヌ)が日本領事館の建物など昔のままに残っていたのが懐かしかった。

飛行機で広州へ、テレビ塔の上からみると昔来たときの面影は全く無い近代都市である。豪華なホテルで一泊し、翌朝特急列車で香港へ。三十二年前日本から最初の文化人訪中団の一員として複雑な感情で国境の小さい鉄橋を歩いて渡ったその橋はいつ通ったのかわからないほどであった。香港から夕方の飛行機で成田へ、いつもながらの忙しい旅であったが、実りの多いものであった。今回は8ミリVTRを持参、テープと共に音楽や劇をとつたし、また尺八のみならず楽器やテープ、楽書などの資料も持ち帰った。希望があれば会員にお見せしてよい。

### 豊澤仙廣師

#### 三次市の特別功労表彰第一号に

仙廣前副会長の義太夫に対する貢献は斯界で知らぬ人はありませんが、出身地・三次市に対しても多額の寄附・寄贈等で多大な支援をされ、特別功労表彰の第一号に選ばれ表彰を受けました(2月26日)。師は、記念に贈られた特大の三次人形の飾られた代々木の自宅で療養中ですが、「協会をよろしく」と協会のことばかり気にかけておられます。



## 鶴澤一二師の

## 八重桐廊噺の二丁鼓

相談役 豊澤 猿三郎

大正の中頃、鶴澤一二さんという師匠が居られました。其のお方は盲人ですが、とても陽気で舞台も明るく、音色も派手で、正面切って弾く立派な芸でした。此の方が、堀山姥の八重桐廊噺の奥で、弾いていた其の三味線で小鼓と大鼓の音を出す二丁鼓という特殊な芸をもって居られます。太夫はおかみさん（竹本二三竜）が語って、終り近く八重桐が山姥に成ると、弟子の一造さんが舞台へ上りシンを弾き、二三竜さんは見台の蔭に置いた長唄の三味線で高音を弾き乍ら語ります。二三竜さんは語っても弾いても立派なもので、清一さんが千代の富士なら、二三竜さんは旭富士という芸の行き方でしょう。一二さんは真ん中で「ハーオッ」ボンボン「イヤァ」パチパチと大きな声で少し笑顔で、実に夜が明けた様な立派な合奏で、段切りの早聞な処へくると、お客様は熱狂します。

此の芸が、或る宮家のお耳に入り、大正十三年の春、ある日突然宮家から侍従が見え、明日邸へ来て演奏する様、内親王様がお聴き遊ばされる故、粗相の無いよう、二十分以内を終る事、等打合せして帰りました。翌日は

斎戒沐浴して御殿へ参り、大出来で終りました。演奏中へ屋根ではいたちが踊るやら、の処は三味線でいたちの鳴き声を出すので、内親王様にはほほ笑まれ遊ばしました由、女官から伺いました。そして大きなお包み（学校の本くらしいの）を載き、帰宅しました。二三竜さんが三味線箱から出してアッと驚きました。「おとっつぁん、一万円と書いてあるよ」「エッ、一万円、イチイチイチ……」一二さんはお包みを受け取ると肌に着いた毛糸の腹巻へねじ込みました。「お春、近所の若い衆、十人でも二十人でも呼んで来い。今夜、私の家で飲み明かして明朝九時まで居てくれ」とたのんで来い。金の事は必ず言うなよ。一造は酒屋へいって酒五升届けてもらえ、寿司屋へ行って一円の大皿二枚誂え、角の三好野へ行つて五皿（一皿は豆大福三個、あずき鹿の子三個、一皿十銭）、スルメ五十銭買って来い」と命令しました。近所の衆は、ロハで朝迄飲めるので大入満員です。余り飲めない者は花札を始める。通りかかったお巡りさんが、一二さんから訳をきいて「やってもよいから静かにやりなさい」とのご注意。夜が明

けて若い衆は職場や我が家へ帰りました。そこへゆうべのお巡りさんが来て「変りなくてよかったナ。今日は僕、非番だから、銀行へついていってあげよう」と親切に言ってくれるので、銀行が開くのを待って行きました。そして一二さんは未だ興奮がさめないのか行員に包みの儘渡し「此の内十円だけ頂きあとの九千九百九十円は貯金とやらにして銀行さんで預かって下さい」と申し込みましたら、銀行の人が二・三人寄って話をした結果「おじさん、これは一万円じゃありません、二円五十銭ですよ。」一二さんは「ギャッ」と言つて二三竜さんの手をギュッと握り「お春どうしよう、どうしよう」と顔色が青ざめました。

此の話が因会（協会）の耳に入り、頭取さんのはからいで、播磨太夫・猿之助（五世）・勝鳳・重太郎・廣兵衛と五人の方が一円五十銭宛出し合つて一二さんに差し上げようとなりましたが、勝鳳さん一人がいやだと言います。処が、雷助さん（普段は強いが人情家）が私が出しませうと話がまとまり、めでたく借金払いが出来ました。事の起りは、宮家では百疋、千疋、万疋というしきたりがあります。その疋を慌て者の二三竜さんが、円と間違えたのです。

いつも長くなりました。ご退屈さまでした。

編集部・注 一疋はお金の単位で二十五文

千疋＝二十五銭

万疋＝二百五十銭



## 邦楽はなぜわからない—その二—

相談役 竹内道敬

前の号で書ききれなかったことを、少し追加いたしますので、お許しねがいます。

今の若い人たちに、もっとも人気があるのが、ロックです。それも物凄い音量で、耳が痛くなるようなのがいいのです。そういうのをヘビーマタルといいますが、それほどではなくても、とにかく凄いな音が人気があります。ようするにリズムなのです。歌の文句は関係ありません。しかしレコードの歌詞カードを見ると、かなり強い主張をしているものがあります。

そこであるアメリカ人に、ちょっときいてみました。あの歌の文句を、はじめてきいてなにをいっているのかわかりますかと。そうすると、よくわかるということです。わからなければ、あれほどの人気はでないといいました。やれやれ、そういうことなのかなと。

英語を少しばかり習った程度では、これは理解するのは無理というもの。言葉の文化の差というのは、こういう音楽になるとはつきりいたします。

ところがです。オペラなどではちがいました。先日『ウィーン・オペラの名歌手』という本を読んではいたら、なかに次のような所がありました。ブリギッテというソプラノ

歌手が、その父からいわれたことばとして、次のようにいっています。

「人々がオペラに行くときは、歌詞のほうも少なくとも三分の二は理解したいと思っている。そうでなかったら、私たちは全部、ただラーラーラーと歌ってもかまわないけれど」

オペラは、舞台装置があり、それらしいかぶつらや衣裳を付けていますから、いってみれば歌舞伎のようなものです。とくに有名な歌は、歌舞伎の名ゼリフのように知られていいます。それでも三分の一はわからなくてもいいのです。古典のものは、洋の東西を問わず同じようなことがあるものですね。

さて、前の号の続きですが、『壺坂』のお里のクドキを例にした私の話を覚えていいますか。お里が沢市のことをいろいろ言葉をかえて呼びます。お前、兄さん、こなさん、御殿、そして沢市さん、といえます。ひとつのこと（ここでは夫のこと）を、手を変え品を変えて表現いたします。それでもこのあたりならまだやさしい言葉だといえそうです。しかし、はじめて義太夫を習おうという人にとってはどうでしょう。第一、女性が夫のことを「お前」というのには抵抗を感じるだろうと思います。やさしそうですいて、やはりなかなかむ

つかしいものです。

やさしいといえ、義太夫よりはるかにやさしい文句で出来ている新内節にも、かなりむつかしいのがあります。たとえば『蘭蝶』というのは、お宮のクドキ「縁でこそあれ末かけて」で知られています。そのはじめは「娥々たる玉顔紅粉を粧う、願わくば軽羅となつて細腰に着かん、願わくば明鏡となつて嬌面を分かつたん」というものです。そういつては悪いのですが、これをきいていた江戸の庶民が、全部理解できたかどうか、はなはだ疑問です。

ついでにもうひとつ、常磐津の『将門』のはじめは「それ五行子にありという、かの紹興の十四年、楽平県なる陽泉の、昔をここに湖の、水気盛んに浩浩と、澄めるは昇る天津空」というのです。これだつて江戸の庶民が理解できたとは思えません。

多分、これらの文句は、言葉の感じ、いいかえれば一種のムードできいていたのでしょう。これを見て、江戸の庶民には教養があったという人はいないでしょう。

ひるがえつて、今の化粧品、自動車、ファッションなどの広告をみると、江戸時代の漢語が、カタカナになったといっているようにです。化粧品といわずカーというのが若い人の言語感覚です。さらに長い言葉を短くするのも流行です。最近の言葉では、デカラケ、スケボー、ディバ、ラグジャ、などがあります。なにしろ省線電車が国電になり、さらにJR線にな



ってしまいう世の中です。テレビジョンがテレビになり、今や単にTVという時代です。

これは冗談ですが、今のそれらの色々を、三百年かもっと後の時代の人が見たら、昭和六十年ごろの日本人は、じつに教養が豊かであつたと感心するでしょう。なにしろ、英語はもとより、フランス語、イタリー語、スペイン語などを、若い人が自由に使っているのですから。

さて、このような時代に、義太夫をはじめとして、邦楽の歌詞がわからないというのは当然です。ですから、もし流行の尖端を行こうとするならば、流行の言葉を使った義太夫を創作しなければなりません。しかし仮にそのような作品ができたとしても、できたものに古くなってしましますし、それは多分、義太夫節ではなくなっています。そのようなことは、ほかの人の仕事です。それよりもなによりも、まず邦楽が好きになることです。演奏家を含めて、邦楽にたずさわる人が、面白いと思うことが大切です。

あなたは邦楽が好きですか、ときかれて「ええ、心から」と答えられる人が、いったいどのくらいいるでしょう。そしてその人が、本当に心から好きな邦楽を、どのくらいほかの人に話しているでしょうか。自分で本当に面白いと思わないで、どうして面白く語ることができましょう。どうしてわかりやすく語ることができましょう。あなたは、義務や義理やつきあいや、あるいはほかにすることがないから邦楽をやっていますか。

もしそうでないならば、熱意をもって邦楽の面白さを、声を大にしていわなくてはなりません。そして演奏家は、自分の面白がっているところを、伝えなくてはなりません。そのためには、もっと勉強しなければなりません。外から見てみると、伝統芸能に関係している人は、どうも勉強不足のようです。

(国立音楽大学客員教授)

邦楽教育を推進する会

日本の音を子どもたちに

日本の音楽教育は、明治の始めより西洋音楽一辺倒である。邦楽を知らず卒業し、親となる。いまやその土壌は枯渇せんとしている。実際に小学校音楽教師として幾多の困難と闘い乍ら邦楽実技に取り組み、成果を挙げている茅原芳男氏が各方面に呼びかけて、推進する会を結成した。3月25日に国学院講堂に多数の人を集め「邦楽教育推進のつどい」が催され、講演・実演が行われた。

次いで4月30日、芸団協と音楽議員連盟の会合にて、邦楽団体連絡会議の要望として、音楽連国会議員の方々に文部省に働きかけて戴くようにお願ひした。更に百万名を目標に署名運動を展開中(現在30万名位)である。邦楽の中の義太夫節に携わっている当協会・会員に大いに関わりのあることなので、早急に席を改め皆で考えましよう。(綾太夫)

特別会員二口以上の方(昭和62年度)

- 池田弘一様 二口 (故)菅邦夫様 三口
- 中島古平様 二口 松井一男様 二口
- 山田操様 四口 和田博様 三口

御寄附(昭和63年1月~3月)

- 竹本駒之助師 一〇〇,〇〇〇円
- (故竹本春駒師葬儀に際して)
- 鶴澤重輝師 一〇〇,〇〇〇円
- (叙勲内祝として)
- 池田弘一氏(新年会) 一〇,〇〇〇円
- 竹内道敬氏 一〇,〇〇〇円
- 林茂蔵氏 一〇,〇〇〇円
- 真岩正信氏 一〇,〇〇〇円
- 高野俊雄氏 七〇,〇〇〇円
- 竹本土佐廣師(新年会) 五〇,〇〇〇円
- 中島古平氏(新年会) 五〇,〇〇〇円
- 和田博氏 五〇,〇〇〇円
- 野田勝也氏 三〇,〇〇〇円

寄贈

- 女流義太夫本牧公演後援会様 一月公演プログラム印刷一式
- 一月公演生花 一基
- 景山正隆様 四月公演記録ビデオ 三本





# 小言は言うべし酒は買うべし

## 女義後援会継続

### 昨年度実績は百万円!

毎月の本牧亭公演は、美容院に行ったら足が出てしまう位のわずかな出演料でも、月々二十万円近くの赤字になってしまいます。この状態をお知りになって、赤字の心配なく舞台をつとめられるようにと、高野俊雄・池田弘一両氏が発起人となり、「木戸をつもう」と提案して下さったのは、昨年三月のことでした。その後、河野国声氏・松尾武市氏の御賛同も得て、「女流義太夫本牧公演後援会」へと発展、義太夫協会会報で広く呼び掛けた結果は、別掲のとおりです。「百万円くらいあれば形がつこうか」という呼び掛けの言葉に合わせたかの如く、何と本当にピッタリ百万円という皆様のお気持が結集し、おかげさまで六十二年度の赤字額は、これまでの半分以下に抑えることができました。御支援下さいました皆様には心より御礼申し上げます。

しかし、この一年間を振り返ってみて、後援会の御厚情に価する公演企画・演奏内容といえたでしょうか? 危惧する声、反省する声、内部的にも高まってきた折も折、「さしあたり六十二年だけでも」と発足した後援会が、

ちょっと形を変えて、いま暫く継続して下さいという朗報がもたらされました。

しかしながら、協会も出演者も、いつまでも安穩と甘えていていいものでしょうか。大きな愛情をもって「根本中の根本」を指摘して下さい。後援会に、何とかして報いなくて

はなりません。協会も出演者も、この一年を深く反省し、皆様の御満足のいくような、少なくとも努力の跡は認めていただけるような公演を心掛けねばならないと思います。会員各位ならびに義太夫愛好の皆様におかれましては、次ページの趣意書にありますとおり、どしどし小言をおっしゃっていただきたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

(後援会発足までの経緯と趣意書は会報第四十号・六十二年九月二十四日発行 其の後の動きは会報第四十一号・六十二年一月八日発行を御参照下さい。)

#### 本牧亭女義公演後援会御報告

(昭和62年3月～63年3月末日)

#### (収入の部)

池田 弘一様 (木戸料)	100,000円
池田 弘一様 (楽屋見舞い)	100,000円
吉川 英史様	100,000円
河野 国声様	100,000円
佐々木明郎様	100,000円
高野 俊雄様	100,000円
竹本 朝重御連中様有志	100,000円
竹本駒之助御連中様有志	140,000円
早川 勉様	10,000円
松井 一男様	20,000円
松尾 武市様	100,000円
渡辺 兼佐様	50,000円
	<hr/>
	1,020,000円

#### (支出の部)

竹本越道、鶴澤重輝 叙勲を祝う会生花	20,000円
	<hr/>
	20,000円
差引	1,000,000円



## 木戸料御礼ならびにお願い

むかしの御定連の故知にならって、おこがましくも「木戸をつもう」とおさそい申しあげましたところ、多くの方々が、さまざまな形で御協力くださいまして、なんと百万の木戸料がつまれました由、まずもってこれはギネスブックに残ってしかるべき、稀にして妙な成果だと存じます。

協会に具体的な支出計画をただしたわけでもなければ、後援会規約をつくるわけでもなく、ただ本牧亭に出演する真摯な正会員の不安と負担をいささかでも解消の方向へもってゆきたいという気持と、私たちにころよ四季の夜を提供しつづけてくれた本牧亭そのものへの思いから、「いかがなものでしょうか。お仲間になっていただけませんか。」と、おぼろげと言いつつ出した結果が目録額達成というのですから、やはりギネスブックものことです。誠に有難いことであります。

この成果を、協会と出演者の人々には次のように受けとめてもらいたいものです。まずは二日間の公演を熱烈に支持する声の現われであるということ、二つには叱咤激励の声の現われであるということ。

注文をつけるということは、「木戸をつもう」という純粋な思いからはみ出すことになりましようが、この一年をふりかえってみて、本牧亭の舞台での成績はどうだったでしょう。

われわれを芸の三昧境に誘ってくれた演奏がどれほどあったでしょう。むしろ聞くに堪えないもののほうが多かったと言ったら出演者はどんな顔をするでしょうか。腹を立てて電話でもくれたらうれいことです。楽屋うちすったもんだの雑音は聞こえてきても、舞台の妙音さらになしでは洒落にもなりません。口はばつたいことを申しました。ところで、「小言は言うべし、酒は買うべし」と申します。そこで本年は、「木戸をつもう」に「小言を言おう」を加えてながしかのことをしたいと考えました。正会員(出演者)の皆さんには、私どもの応援の気持に水をさすようなごさかしい妄動を離れ、もっと芸の修行に、いや芸の基本の精進につとめてもらおうというのが趣旨と言えは趣旨です。

規約や組織をつくらぬことも昨年と同様です。もし、こんな愚かなたくらみに、のってやろうと思しめます御方様がおいででしたら、御気持のほどを協会事務局の者へお伝え下さいますようお願い申し上げます。

昭和六十三年四月二十日

言い出し人 高野 俊雄

池田 弘一

## お知らせ

◎四世鶴澤重造師追善浄瑠璃会行われる

義太夫協会元監事・人形浄瑠璃文楽座三味線部代表故鶴澤重造師が亡くなられて早一年数ヶ月、五月七日(土)、ガスホールにて追善浄瑠璃会(鶴澤重造会主催)が行われ、関係者一同重造師の芸とお人柄を忍びました。尚、この追善会にあたり、重造師夫人・堀田鶴子様より、義太夫協会に五〇〇〇〇円の御寄附を賜りました。御報告と共に、紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

◎女義太夫一代「豊竹団司」じよるり人生  
昭和61年10月〜12月まで神戸新聞泉城版に50回にわたり連載された豊竹団司師の一代記がこのほど一冊の本にまとまりました。読みものとしても、また女義が職業たり得た時代の資料としてもお役に立つでしょう。

神戸新聞出版センター発行 一〇〇〇円

◎三味線・パチ・コマを頒布いたします

和楽器を蒐集・研究しておられる及川尊雄先生の御尽力で、協会にも三味線・パチ・コマがいくつか集まりました。(及川先生の和楽器蒐集の御苦労は、60年8月20日発行・義太夫協会会報35号に寄稿して頂きました。)

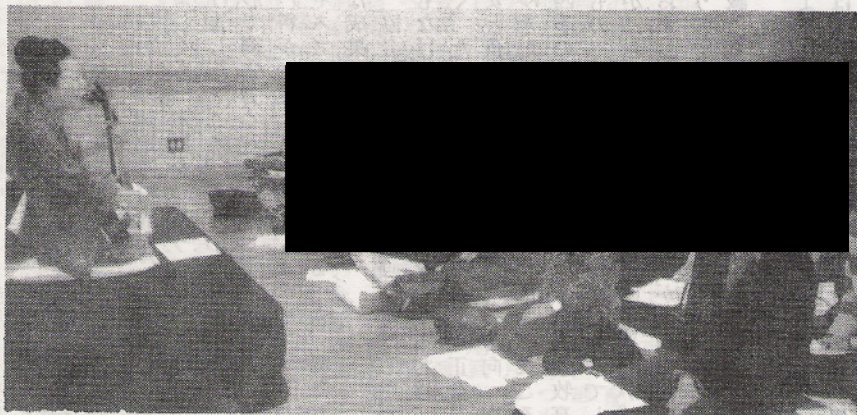
このたびそのうち若干をお頒布できることになりました。(但、会員優先、現在稽古中の方に限ります)該当する方は至急お申込み下さい。入手できたら稽古を始めたという方も今回に限り御相談に応じます。



教師のための義太夫講習会

# 一日体験教室盛況

△アンケートから▽



撮影 竹本綾太夫

語ってみませんか

「義太夫を語ってみませんか」  
「三味線を弾いてみませんか」

今年になって二回、一日体験教室を開きま  
したが、いずれも盛況でした。

もちろん、わずか何時間かで会得できる訳  
のものではないでしょうが、どんなものか一  
寸試してみるというのには、現代に合っている  
のかもしれない。特に二月の「語ってみま  
せんか」は、読売新聞の「あなたもどうぞ」  
というシリーズに三回連続して義太夫がとり  
あげられ、前宣伝が効いたのでしょうか。問合  
せにつぐ問合せで、多い日は一日二十六本も  
の電話でうれしい悲鳴でした。「語ってみま  
せんか」の様子は、翌日のTBSラジオ「鈴  
木君のこんがりトースト」で放送されました。

義太夫を語ってみませんか 63年2月17日

於演舞場スペース・アルファ

講師 竹本 朝重

参加者47名	アンケート回答44名
10代2%	20代16%
20代16%	30代16%
30代16%	40代18%
40代18%	50代25%
50代25%	60代14%
60代14%	70代4%
70代4%	無回答5%

◎義太夫を語るの初め

経験あり

98%

（但、この経験ありは、62年11月、本牧亭  
で開催した教師のための講習会の「語っ  
てみましょう」のコーナーでのこと）

◎文案（人形浄瑠璃）をナマで

よく見る 7%

たまに見る 45%

見たことがない 39%

無回答 9%

◎文案（人形浄瑠璃）をテレビで

よく見る 5%

たまに見る 66%

見たことがない 20%

無回答 9%

◎歌舞伎をナマで

よく見る 16%

たまに見る 68%

見たことがない 16%

無回答 5%

◎歌舞伎をテレビで

よく見る 16%

たまに見る 68%

見たことがない 11%

無回答 5%

◎新聞を見て一度自分でやってみたかったの  
で出席させて頂いたけれど、何が何だか解  
らず時間が過ぎたというのが実感です。

◎義太夫独特の節まわしになかなかのれなか  
った。良い経験ができました。

◎日本人なのに洋楽ばかりで、これから意識  
して一歩ずつ勉強してみたいと思います。

◎節まわしが大変難しかったです。それと、  
節目での出だしのタイムシグが難しく、音  
程も一定せずに苦労しました。

◎久しぶりに声を出してとてもよかったです。



○とても丁寧な御指導でわかり易く、のびのびできました。一節一節に沢山の感情なり仕草なりが含まれていることに感激です。とてもよい企画だと思います。

○百聞は一見にしかず。体験はスバラシイ。もっとやってみたいと思います。次回観る歌舞伎や人形浄瑠璃が楽しみです。子供達にも是非観るチャンスを作ってやりたい。

○できるだけ今后伺います。現在邦楽をやるのは正座が前提とされるのでつい縁遠くなるのでしよう。

○素人にもわかり易く、熱心な御指導ありがとうございました。太夫さんの教授法に学びました。

三味線を弾いてみませんか 63年5月14日

於演舞場スペース・アルファ 講師 竹本弥乃太夫

参加者37名	アンケート回答36名
男性19%	女性81%
10代11%	20代19%
30代22%	40代19%
50代14%	60代6%
70代3%	無回答6%

◎三味線を弾くのは

初めて	53%
経験あり	42%
無回答	5%

◎文案（人形浄瑠璃）をナマで

よく見る	8%
たまに見る	53%

見たことがない 33%

無回答 6%

◎文案（人形浄瑠璃）をテレビで

よく見る 28%

たまに見る 53%

見たことがない 14%

無回答 5%

◎歌舞伎をナマで

よく見る 28%

たまに見る 61%

見たことがない 11%

◎歌舞伎をテレビで

よく見る 47%

たまに見る 45%

見たことがない 8%

○何から何まで初めてでした。最初とてもむつかしいと思いましたが、少し出来ると本当に楽しいと思えました。やっとなんかわかったような気がするころ終ってしまい残念です。

○時間が少なかったので四時間位してもよいと思います。

○丁寧に教えて下さってよくわかりました。実技の間にプロの人の語りもちょっと入った良かったのでは。

○大変おもしろかった。太棹の響きは美しいので大好きです。こういう機会をもっと作ってほしいと思います。譜本は音符でも示したらいかげんしょうか。両方で進んだほうがわかりやすいと思います。

○むずかしいと思いましたが、又練習したいと思えました。日本に伝わる楽器の代表であるのに、身近になく本当に残念です。右手と左手と両方考えながらひくのは大変だなあとありますが、小さいうちから親しんでいたら、きっともっと楽しいだろうと思います。

○楽しかったのでアツという間でした。日本音楽がないがしろにされている現代において、非常に有意義な催しだと思います。今後も是非続けていたいただきたいと思えます。

○一応「弾いた」という経験ができて、嬉しかったです。さすがに楽器も重く、音も自分のすぐそばで響くせいか「ズーン」と重厚で感激しました。

○太棹のダイナミックな音色に魅せられました。神経を集中させてのあつという間のひとときでした。ありがとうございました。

○全く初めてでしたが、とても力が要るのに驚きました。強く音を出すのがむずかしいと思えました。

○スピードについて行けなかったが楽しかった。メロディーが力強い感じ。

○大変に楽しかった。思ったより弾けたのでうれしかった。でもバチはちゃんと糸にあたらぬし、ちゃんとすんだ音にならないし、リズムもむずかしかった。三味線は初めてだったが、ギターよりは面白そうに思います。機会を得て練習できたらと思います。これからもこういうことを是非多くやって下さい。





後悔ばかりもしてられない

—ある音楽教師の雑感—

久 行 正 邦

小学生の頃からドレミファの音楽に親しみ、ロマン派の名曲の数々を心の糧として青年時代を過し、これこそが自分の生きる道と決めて音楽科教師の道に飛び込んだ私。しかし、教職について以来これまで絶えず心にひっかかっているものは、日本の伝統音楽の扱いに関することである。邦楽に対する誤解、無理解、無関心……。これらを克服し、邦楽を正しく理解させるためには教師は何をなすべきか、これまで多くの先生方が悩み、考え、努力し、立派な研究も数多くなされている。ところがそのようなすばらしい論文や研究発表が次々となされてきたにもかかわらず、現実には一般の邦楽への理解が深まってきたとは私には思えない。相も変わらず洋楽だらけ！洋楽、もちろん結構。だがこの世界に自国の伝統音楽に理解や関心を示さず、輸入品の音楽だけを有難がっている国があるだろうか。どこの国でも、外国の音楽に理解を示しながらも、根底には自国の伝統音楽に自信を持ち、それが諸外国に広まることを誇りとしている。当然のことだと思う。

邦楽は「老人趣味」だとか「古くさい」などとよく言われる。冗談じゃない。「古い」

と「古くさい」とは意味が違う。古いといえども義太夫などはベッパとわずか三十四歳しか違わない。どんなに古い作品でも名作ならばそれぞれの時代に新しい発見があり、新たな感動があるのだ。

K・シュトックハウゼンが一九六六年にNHK電子音楽スタジオで製作した「テレムジック」を御存知の方も多いであろう。この曲が彼の最高傑作であるかどうかは別として、私には個人的な思い出のある曲でもあるので、現在でも愛聴しているのだが、この十七分二十秒の作品の中には様々な非ヨーロッパ的な音がきかれる。雅楽、東大寺修二会の声明、能、その他……。外国人ですら日本の伝統の中の価値を理解しているのだ。

日本の作曲家の中にも日本の伝統音楽の中に素材を求め、新しい美、新しい価値を見出し、新しい音作りにはすばらしい成果を挙げ、国際的な評価を得ている人が少なくない。特に進歩的な傾向の作曲家ほど伝統的なものに対する関心が強く、その捕え方が適確であるように思える。伝統を無視して進歩はあり得ない。邦楽を古くさいものとしてしかとらえることのできない人こそ考え方が古いの

だろうが、そのことに御本人が気付かないから気の毒な気もする。

私自身の邦楽無関心時代をふり返り、色々反省したり、考えたりしてみるのだが、邦楽への正しい理解と普及をはかるには、現在の音楽教育のあり方を根本的に問い直す必要があるのではないだろうか。私自身がそうであったように、音楽教師の大多数が西洋の音楽を学び、大学では邦楽とは無縁のまま教員免許を取り、各学校に赴任する。邦楽に関しては実力なき教師として。こんなわけだから教科書に載っている邦楽教材（決して多いとは言えない！）の扱いにも消極的にならざるを得ず、カットしてしまうことすらある。生徒にしてみれば邦楽に関する知識を殆んど得ることなしに大人になってしまふ。食わず嫌いどころか、どのようなごちそうがあるのかすら知らないままに。

教師はもちろん反省をし、何とか改善の糸口をつかもうと種々の研究会に参加してみるのが、一度や二度研究会に顔を出したくらいで解決するような生やさしいものではない。結局、一時的な経験だけで長続きせず、成果があがらない。実際、邦楽に関する研究会には参加者がとても少ない。「教師のための義太夫教室」などは毎回盛会で喜ばしいことではあるが、参加者の大部分は国語の先生方だそうで、音楽の先生はきわめて少ないとのこと。もっとも、義太夫節だけが邦楽ではないし、私の知人にも長唄や能楽の研究に明け暮れている人が少なからず居るので、義太夫教室



への参加が少ないだけで悲観することもあるまいが、やはり本牧亭で同じ教科の仲間の顔が見えないことはとても淋しい思いがする。

さて、音楽科教員養成大学で邦楽を必修にしたらどんなものだろう。色々と困難な点はあるだろうが、カリキュラムの中に邦楽を重要科目として位置づける。もちろん教員採用試験にも邦楽実技を課す。大変なことだとは思いますがこれくらい思いきらなければ現状を大きく変えることは難かしいのではないか。そうならば、教員の努力だけではどうしようもない。教育行政に携わっておられる方々や政治家の皆さんにも大いに勉強してもらって、それにふさわしい条件を整備していただかなくてはならない。学校での音楽の授業を減らそうと考えたり、邦楽は時代遅れであるかのように考えている人にはこの仕事は務まらない。経済的にいかに繁栄を誇ろうとも、芸術・文化に理解の少ない心の貧しい人が政治家の中に居るうちは文化国家とは言えない。西欧の真の文化国家を見れば誰にもわかることだ。

また反対に「日本人だから邦楽を！」といったケチな考えでも困る。邦楽愛好家の中には邦楽の中だけにどっぷりとつかったままで西洋音楽のことはサッパリという人も居る。これでは西洋音楽一辺倒の人達と少しもかわらない。邦楽を大事にするのと同じ気持ちで西洋音楽やその他の音楽にも接し、世界の中の日本の伝統音楽としてとらえることが邦楽を正しく理解する道ではなからうか。邦楽が軽視されている理由のいくつかは、邦楽自身の

中に在るのかも知れない。この点大いに考えてみなくてはなるまい。洋楽畑の人が邦楽の研究にすばらしい成果を挙げている例は数多いが、その逆の場合はどうだろう。色々と考えさせられる。

私自身、四十歳代の終りになって、偶然の機会に「教師のための義太夫教室」を知り、以後約二年間、義太夫節のとりこになって現在に至っている。参加者の中には若い人がとても多く、喜ばしい限りであり、またうらやましくも思う。どうしても早くこのすばらしさに気がつかなかったのだろうか。後悔もしたが、後悔ばかりもしては行かない。彼等が私のように目覚めの遅い人間になっては困る。今の若者たちに邦楽のすばらしさに気付かせ、伝統的遺産の価値を正しく理解し、幅広く吸収して、視野の広い大人に成長してもらえよう、今後も微力をつくしたい。

(東京都立上野高等学校教諭)



### 稽古場を捜しています

安心して大きな音の出せる、交通の便の良い格安な稽古場(マンションの一角など)はないものでしょうか。仙廣師のおかげで「新小松」を自由に使わせて頂いた時には全く悩まないですんだ稽古場捜しに苦勞しております。会員各位の情報をお寄せ頂ければ幸いです。

### 《お願い》

※本牧公演の窓口で、会員の方はお名前をおっしゃって頂けると助かります。窓口で翌月の番組をお手渡しした方には、経費節減のため郵送を省略させて頂きたく御協力をお願いする次第です。お名前とお顔がなかなか一致せず、失礼があってもいけませんので、どうかよろしくお願い申し上げます。

※再びキャッチホンについてー御理解をー協会事務所の電話をキャッチホン(わりこみ電話)に切りかえましたので、話し中でもふつうの呼び出し音しか聞こえません。ツーツーという話し中の信号音は一切いたしませんので、留守だと思ってすぐに切らずに、もう暫くお待ち下さい。或いは、一寸間をおいてもう一度おかけになってみて下さい。急いでつなごうとするのですが、タッチの差で切れてしまうことが多いので、再度御理解をお願いする次第です。



協会の動き

昭和63年1月より  
昭和63年6月まで

鳴もの研修生発表会

於国立小劇場

3月20日 義太夫協会公演会 竹本越恵・豊

澤多美子芸団協助成新人奨励賞表

彰式 芸団協常任理事・松島庄十

郎師より祝辞 於本牧亭

20日 普及部会 於はる乃

3月21日 義太夫協会公演会 第3回豊澤仙

廣賞授与式 竹本越若が受賞した。

13頁参照 於本牧亭

(昭和六十二年度)

1月7日 公演部会 於事務局

1月9日 資料・記録部会 於事務局

1月13日 経理部会 於事務局

1月20日 義太夫協会公演会 鶴澤重輝叙勲

を祝う会 竹本佳之助初舞台

1月21日 義太夫協会公演会 竹本越道叙勲

を祝う会 於本牧亭

1月29日 義太夫節保存会 62年度文化財補

助金に係る事業の実態調査 於本牧亭

29日 新春懇親会 於東京都教育庁

1月30日 63年度民間芸術等振興費補助金事

業計画書提出 於蓬萊閣

1月31日 第3回義太夫教室OB演奏会 義

太夫教室OB会主催・義太夫協会

後援 於本牧亭

2月9日 演舞場稲荷初午祭

2月11・12・13日 女流後継者育成事業 草

履打・廊下研修(豊竹呂大夫師指

導) 於国立劇場稽古場

2月12日 公演部会 於ロミ

2月14・15・16・17日 女流後継者育成事業

奥庭研修(野澤喜左衛門師指導)

於国立劇場稽古場

2月17日 教師のための義太夫講習会「義太

夫を語ってみませんか」(文化庁

助成) 8・9頁参照

2月20・21日 第7回伝承者研修発表会(義

太夫節保存会主催、義太夫協会後

援、文化庁・東京都助成)

2月22日 昭和63年度補助事業についてピア

リング 於文化庁会議室

3月2日 普及部会 於芸団協会議室

3月2日 第5回運営特別委員会 於文明堂

3月3日 芸能人年金推進委員会

3月6日 '88都民芸術フェスティバル 第18

回邦楽演奏会 竹本土佐廣他女流

が出演した。 於第一生命ホール

3月11日 公演部会 於芸団協会議室

3月11日 義太夫節保存会 昭和62年度文化

財保存事業実績報告書提出

3月12日 資料・記録部会 於事務局

3月15日 義太夫教室(文化庁助成)第40期

終了 於演舞場スペース・アルファ

3月15日 第9期歌舞伎俳優研修修了発表会

第9期竹本研修生発表会、第4期

3月20日 義太夫協会公演会 竹本越恵・豊

澤多美子芸団協助成新人奨励賞表

彰式 芸団協常任理事・松島庄十

郎師より祝辞 於本牧亭

20日 普及部会 於はる乃

3月21日 義太夫協会公演会 第3回豊澤仙

廣賞授与式 竹本越若が受賞した。

13頁参照 於本牧亭

(昭和六十三年度)

4月1日 公演部会 於芸団協会議室

4月6日 編集部会 於事務局

4月9日 昭和62年度民間芸術等振興費補助

金(青少年等芸術普及)実績報告

書提出

4月20・21日 義太夫協会公演会 於本牧亭

4月30日 昭和62年度民間芸術等振興費補助

金(青少年等芸術普及)額確定通知

5月2日 公演部会 高野俊雄常任相談役出

席 於芸団協会議室

5月2日 経理部会 於リベラ

5月10日 義太夫節保存会 昭和63年度文化

財保存事業補助金交付申請書提出

5月11日 第10期竹本研修生選考試験

5月14日 於国立演芸場 第一演芸研修室

教師のための義太夫講習会「三味

線を弾いてみませんか」8・9頁

参照 於演舞場スペース・アルファ



5月15日 三味線即売会 於事務局  
5月16・17・18日 女流後継者育成事業 舟  
別れ研修(豊竹呂大夫師指導) 於国立劇場稽古場

5月20日 第13期文案研修生・第10期歌舞伎  
俳優研修生・第10期竹本研修生合  
同開講式 於国立劇場第一会議室

5月20・21日 義太夫協会公演会 於本牧亭  
5月26日 定例理事会 於文明堂

5月27日 義太夫教室第41期(初級入門コー  
ス)開講 於演舞場スペース・アルファ

5月28日 昭和64年度補助事業概算予算提出  
5月30日 三味線部部会(5月26日の理事会  
にて新設決定。野澤錦輝・竹本綾  
一が担当となった) 於事務局

6月2日 公演部会 高野俊雄常任相談役・  
池田弘一相談役出席 於芸団協会議室

6月6日 三味線部部会 於事務局  
6月13日 三味線部部会 於事務局

6月20日 義太夫協会会報第42号発行 於京橋会館

第三回豊澤仙廣賞

竹本越若が受賞

副賞は河野国声氏より

去る三月二十一日、本牧亭定期公演席上に  
て、竹本越若に第三回豊澤仙廣賞が授与され  
ました。越若は、49年の初舞台以来、欠かさ  
ず本牧公演に出勤し、実に真摯な態度で義太  
夫節に臨んでいます。また、最近資料・記  
録部員として、地味ながら協会にとって重要  
な仕事を続けていることが認められ、このた  
びの受賞となりました。授与式では、田辺会  
長から「仙廣も臥っではおりますが、越若の  
受賞を大変喜んでおります」と仙廣前副会  
長の近況も報告されました。  
尚、副賞は、本年度も株式会社十全を通じ、  
河野国声常任相談役よりおくられました。

「受賞者略歴」

竹本越若(たけもとこしわか)  
昭和47年 義太夫教室第25期卒業。48年  
竹本越道に入門、竹本越若となる。49年 初  
舞台。50年 芸団協助成新人奨励賞受賞

毎月20・21日の夜は本牧亭へ

曜日にかかわらず毎月20日と21日は、  
上野広小路本牧亭で定期公演を行って  
います。女流を中心に、時に解説・人形など  
も混えますが、全国唯一の素浄瑠璃定期  
公演です。お誘い合せお出かけ下さい。

訃報

菅 邦夫氏(参与・特別会員) 62年11月13日逝去

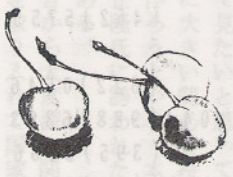
(管内科診療所長、永年特別会員として、ま  
た58年以降は参与として御支援頂きました。  
お人柄そのままのやさしい笑顔、世話もの  
を得意とされた肩衣姿が目につきます。)

野澤吉春師(正会員) 62年11月18日逝去  
(函館を本拠に活躍された北海道唯一人の正  
会員。多くの義太夫関係者が、渡道の折、  
お世話になりました。)

竹本春駒師(正会員・義太夫節保存会理事) 63年1月31日逝去  
(明治24年7月 東京女義興行主の雄である  
宮田甚五郎の長女として神田に生まれる。  
養母竹本文福。15才で竹本春子太夫に入門、  
春駒となる。以後東西で活躍し、越駒・駒  
龍等多くの人を育てた。協会副会長・駒之  
助の養母でもある。昭和48年春、勲五等瑞  
宝章を受く。舞台人として、指導者として  
第一級の人であった。この六、七年は駒之  
助のもとで療養を続けていたが、風邪が元  
の肺炎で他界。享年96才。遠方なので、葬  
儀等は全てお身内ですまされました。)

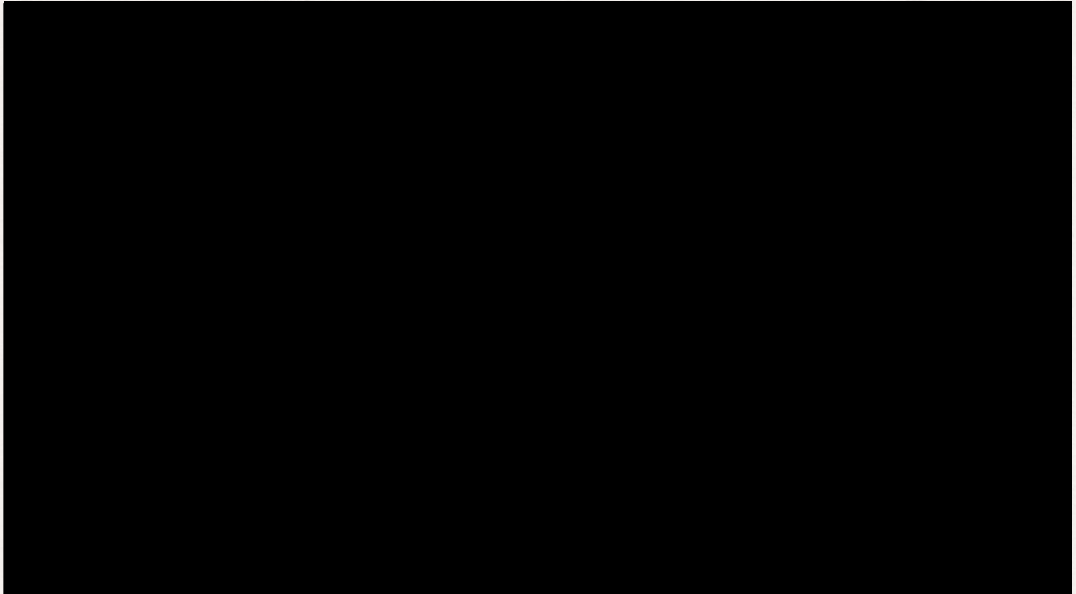
関谷欣生氏(賛助会員) 63年3月12日逝去  
竹本叶美太夫師(歌舞伎義太夫・竹本連中)  
63年4月28日逝去  
(主に関西で活躍されました。享年84才)

御冥福を心から御祈りいたします。

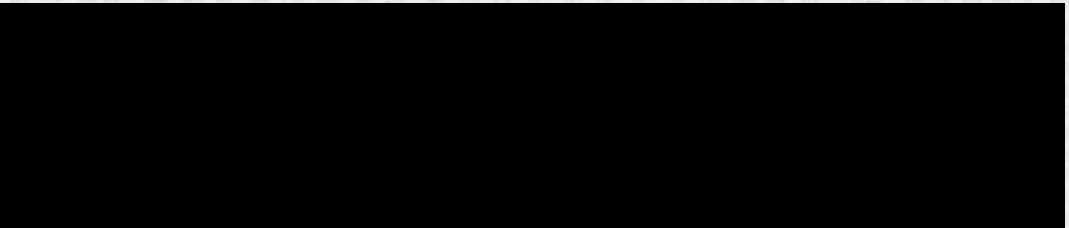




新入会員御紹介



住所(住居表示)変更



※編集部から※

このところ、お叱りと御催促ばかり……「協会の動きが全然分らない」「短くてよいから、もっと頻繁に出したら？」等々。半年も間があいて本当にすみませんでした。諸先生方にも、原稿を早く早くとせかせかたのに発行が遅れ、お詫び申し上げます。「芸談を」との御提案がありましたので、編集部と理事会で諮った結果、早速取りかかるといになりました。師匠方の雑談でも何でもとにかく録音させて頂こうと張り切っておりますので師匠方は御覚悟のほどを、また御協力をお願いいたします。猿三郎師の読み物は、毎回大好評で、皆様心待ちにいらっしやると思えますが、一冊の本にしたらとの御意見も頂きました。紙面については、字ばかりで読む気がしないとの御指摘



と迷っています。

神田の古本屋に会報のバックナンバーが、八千いくらで出ていたとか、うれしいような寂しいような……少なくとも後々の資料にと願って編集しているつもりなのですけれど。